

# 初年次における 授業外学習についての一考察

田 上 優 子

## 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の爆発的な感染拡大を受けての社会活動、生活全般の規制や拘束も、状況に応じ緩和されつつあり、令和5年度の教育機関での授業はおおむね対面でおこなわれる様相を呈している。

コロナ禍の自粛生活を強いられることとなった3年間で、大学英語教育の現場にも変化と柔軟な対応が求められるようになった。体験したことのない状況下でも「学び」を停滞させないために、多くの教員が教授内容を周到に準備し学生に正しく伝え、理解してもらうことにこれまで以上に配慮の時間を割き、創意工夫をしながら授業を何とか乗り切った経験をしたと筆者は認識している。具体的には従来の「対面」授業に加え、コロナ禍で経験することとなった「遠隔授業」（オンライン授業・教材提示型授業など）という非対面型授業を導入した授業が開講された。オンライン授業への対応や教育効果の是非は様々な意見がある一方で、このような環境下では、教育目標が十分に達成できていたか、教育の十分な質保証はなされていたか等について論じるには多くの事例や実証報告を待たなければ安易で性急な省察はできないものとする。いずれにしても、このコロナ禍の経験により、教室での教師主導による一斉授業から学習者を中心に据えた「個」の学びに注目がなされ、主体的な学習つまり「自律的学習」の重要性が再認識されることとなった。

本研究は大学1年生の「英語自学習」の実際について、学生の授業外学習の記録とふりかえりを考察し、授業外学習の意義について示唆を試みるもの

である。

## 2. 動機づけと自律学習

動機づけ研究については Bandura (1977), Deci and Ryan (1985), Oxford (1990) 等の研究以来、学習を促進する重要な要因として認知されてきたことは明らかである。

一方で動機づけは瞬間的な関わりで可変する要素でもあるため Dornyei & Mercer (2020) は近著でタスクへの関与を喚起し、維持するエンゲージメントの概念を提唱し以下のような中心となる定義をまとめている。

〈学習エンゲージメントの3つの定義〉

- (1) 行動的エンゲージメント：学習活動に積極的に参加し、集中している状態
- (2) 感情的エンゲージメント：学習活動にポジティブな感情を抱いている状態
- (3) 認知的エンゲージメント：課題解決に向けて思考を働かせている状態

これらエンゲージメントの視点は、短期的な情意の様相ではなく、他の学習者（クラスメート）との協働学習やそこから得られる達成感・学習観の変化など学習活動の維持や活動の過程を重視していることから近年では日本の中等及び高等教育でも注視され始めている。（荒木、2020、清田、2010）

また、外国語の学習は、授業外でいかに学習時間を確保し、自律した学習習慣の形成がなされるかが重要であるものの、大学入学時点では多くの学生は「教師主導型」のそれまでの一斉授業の環境で学んだ結果、自分の学びを自ら作り上げるという発想には至っていない状況にある。Tanoue (2004) は4年制女子大学生へのアンケートの結果から、学習の推進と持続について考察し、自律した学習者を支えるのは、願望・動機に加えて学習に対する自信と多様な学習の積み重ねであり、それによって学習者自身の客観的な視点も確立されるという点を強調するとともに、自律した学習者育成のための学びの「場」づくりを提案した。さらに田上 (2005) の研究で、日本人成人学習者133名におこなった「英語学習」に関するアンケート調査に基づく報告の中で、学校卒業後の社会人学習者は日常生活の中でできるだけ英語にふれる

機会を作ることによって学習習慣を形成していることが判明した。特に被験者の7割以上がラジオ、テレビという「放送英語」の媒体を教材として利用した「自学習」をおこなっていることが明らかになった。この研究から17年を経て、情報機器の整備環境や学習メディアも著しく変化をしていますが、改めて本研究で、学習者の「自学習（授業外学習）」の実態調査をすることで、授業を補完する自習の意義についての考察をおこなうことを本稿の目的とする。

### 3. 研究の背景

筆者の勤務校では（2022年4月入学生より）共通教育科目における英語カリキュラムの改編により“Academic English Program”（学術英語）から“Academic and Career English Program (ACE)”（学術・キャリア英語）という生涯をとおして英語を学び続けるという科目内容の変更がなされた。1, 2年次で全10科目の履修が必修科目として開講される。このACEでは2年後期に1,000語以上の英語エッセイ（論文）と10分以上の英語プレゼンテーションを最終課題として義務付けていることから、学生は2年間をとおして「英語」を学ぶと同時に、英語で専門内容について探求し、最終課題への準備を自身で進めていくことになる。1年前期では週に5科目開講される英語授業のうち、専任教員が「英語コミュニケーション」「英語セルフラーニング」の2科目を少人数クラス（15名程度）で担当することで、core teacher（担任）の役目を果たすことになっている。また、大学入学後、1年生は大学敷地内の寮に全員入寮し、4名で1ユニットの共同生活を過ごすという入学条件がある。寮を含めた大学敷地内でのWi-Fi環境は整っており、授業内外でのPC使用は制限なくおこなえる学習環境であること、大学入学時にPCの個人購入を全員に課していることも本研究を考察する際に特記する必要がある。

## 4. 対面授業における授業実践（2022）

### 4.1 被験者

開講期：2022年前期

科目名：「英語セルフラーニング（Guided Self Learning）」

授業：100分（週1回）、2クォーターで合計14回の授業。

対象：公立4年制大学 1年

専攻：国際教養、環境科学、食健康が混在。

受講人数：2クラス 30名（女子） 1クラス15名

授業評価：

毎週提出の課題シート（ポートフォリオ）※付録 40%

学期末レポート、プロジェクト発表 30%

出席・授業参加の度合い 30%

## 4.2 授業の概要について

当該授業のシラバスに基づいて、授業のねらいと概要をまとめると以下のようになる。この中から、自学習として学生が主体的に選択し、記録をつけながら継続学習をおこなうことを原則とする。

英語学習における学習者の潜在能力に気づきを与えることを教員は支援することで、自ら考え学習をおこなう「自律学習者」育成に寄与する英語科目として位置付ける。(1) 学生は自らの学習に責任をもつ (2) 学習の伸展が見いだせる学習方法を見出す。(3) 記録をつけて学びを証明する。(4) 多読、多聴を実践する。(5) 色々な方法で語彙を増やす。(6) プロジェクトを計画して調査、研究に挑戦する (任意)。(7) 自分で目標となる「英語資格試験」を決めたら、集中学習をする。

### 第1クォーター

第1講：オリエンテーション、課題シートの記入説明

第2講：自学習例の紹介、提示、図書館利用

第3講～第5講：自学習例の紹介、個人指導

第6講：自学習についてグループ内発表

第7講：自学習についてクラス内発表、ふりかえり

### 第2クォーター

第1講：課題シートの記入の追加説明、プロジェクト活動（調査報告）についての説明

第2講：プロジェクト報告例の紹介、提示、

第3講～第5講：自学習の最終発表準備（第1クォーターと別の学生との協働）

第6講：自学習についてグループ内発表（第1クォーターと別の学生との協働）

第7講：自学習についてクラス内発表、ふりかえり

授業の基本構成として前半は、自学習に活用できる教材（NHKの語学番組の聞き方、英字新聞の活用法、オンライン教材など）の紹介と実践練習にあて、後半は学生のグループ活動を中心に、1週間の自学習をふりかえるディスカッションとグループ内で学生の学習方法を共有しその活動から学んだことを随時ノートテイキングする指導をおこなった。

各クォーターの第8講は全ての課題シート、自学習を証明するノート、記録ファイル、ふり返りシートの提出日とした。

## 5. 結果と考察

### 5.1 学生による自学習の活動報告

学生が提出した自学習の記録（課題シート）の種類について、複数の学生が回答したものをまとめると以下ようになる。

表の右側表記のL, R, W, Sは自学習をとおして学生が英語習得に役に立つと判断した四技能（L:Listening, R:Reading, W:Writing, S:Speaking）を示している。

\* 印の教材は授業内で、教員が紹介したもの、授業内で実践したもの

表1. 自学習教材

		L	R	W	S
①	NHK Radio Program*（聞き逃し配信） 「ラジオ英会話」「英会話タイムトライアル」	○	○	○	○
②	洋楽、洋画内音楽*（リスニング、ディクテーション、歌詞和訳）	○	○		○
③	英字新聞* <i>Japan Times Alpha, Asahi Weekly</i>	○	○	○	
④	月刊誌購読*（ <i>CNN English Express</i> ）	○	○	○	
⑤	英会話 （外国語カフェ活動、留学生との会話）	○			○

⑥	英語日記*			○	
⑦	語彙の補強 (高校時代の学習参考書、TOEFL, TOEIC 対策単語集)		○		
⑧	オンライン教材* (TED Ed., BBC Learning English, 図書館ラーニングcommons活動の一環としてのBBCリスニングリレー)	○	○		
⑨	Youtube (Bilingual Chika, Photoglish, Movie Trailer, Rupa sensei)	○	○		
⑩	Smartphone App. (Smart News, Hello Talk, Word Study, Instagram, Twitter)	○	○		

## 5.2 自学習をとおしての学生の気づき

学生の課題シートでは、反省点も含めて、学習での気づきも記入するように指導をした。学期末のふり返りシートに記述のあったコメントを列挙すると以下のようなになる。

回答1：授業で教員から紹介されたもの、授業内のディスカッションでクラスメートが学んでいるもの、紹介されたものを試みた。

回答2：毎日の課題で実行可能か、週何日なら可能か、どの時間帯に学習できるかなど、自分の学習を調整した。

回答3：NHKの聞き逃し配信を初めて試みた。1日に何度か配信があるので、毎日続けた。毎日できず週に3～4回学習することもあったが、この教材は続けた。

回答4：好きな洋楽を歌詞の意味を調べながら何度も聞き、一緒に歌えるまでになった。学びたいことは「好き」が大切だと思う。

回答5：教員や図書館から借り出したCD付き雑誌は、返却期限があると期日まで学習しないといけない気になる。

回答6：リスニングの自学習と授業でのスピーキング実践を重ね、人前で話すことの抵抗がなくなった。恥ずかしさを克服したように思う。

回答7：リスニングのインプット量は増えたが、会話で即答ができない。インプットの次はスピーキングを実際に行うことが大切だと思う。

回答8：4月は英語ネイティブスピーカーの教員の言うことがほとんど理解できなかったが、リスニングを中心の学習をして学期末(7月)はわかるようになった。次はスピーキングをがんばりたいし、長い英

語も読めるようになりたい。

回答9：リスニングを頑張ったが、リーディングの授業を受けてみて、読みのスピードがアップしてきた。Teacher talk がわかるようになった。

回答10：街中でとっさに英語を話しかけられたが、受け答えができたことに自分自身、驚いた。

回答11：アルバイトで料金や場所について、スムーズに英語で説明ができたのでうれしかった。

回答12：授業を受けてみて simple English こそが相手に伝わる重要な表現であるとわかった。

回答13：クラスメートの上手な発表やサマリーの上手な仕方を聞くことがとても役にたった。真似をして発表準備をした。

### 5.3 考察

継続した複数の学習者がいたという点で表1内に10の学習媒体をまとめたが、提出された課題シートから読みとれることは、学生の学習の多様性である。デジタルネイティブと呼ばれる彼女らにとって、様々な教材(学習情報)を柔軟にとりいれて、英語接触の機会をもつことができるという自学習の実態を知ることができた。学生自身は、それぞれの教材を介して英語を学ぶことで2～3の技能を伸ばすことができていると思いこんでいるが、実際には多様な学習とその継続によって、意図しない他の英語技能の伸展にも結び付くことは大いに期待できる。

提出された課題シートの中にはこれ以外に「120分の映画を1本英語音声で日本語字幕で観た。」「好きな音楽を1日中間いた。」など、記述内容が大雑把で記述からは学習と判断できないものもあつたり、週に1度の提出のために、手書きで課題を書くことを億劫がってまとめて記入した学生の例も見られた。

しかしながら、今回の授業実践の該当科目のねらいは、学生がもつ力、学びたいと思う好奇心や否定されない自由な発想も受容することこそが重要である点も含めて実態把握をしたことから、少数の学生の報告や学習実態についても、引き続き研究継続インタビューなどで詳細を把握したうえで、学生全体の自学習との向き合い方を知ることも必要である。

また、表1内の\*印の教材は授業内で、教員が紹介したものの、授業で実践

したものであり、授業内での具体的な学習方法の伝授も、自学習への導入には必要な要素であろう。実際に、自分で学んだものについて学習した後の気づきとその効果は英語学習のきっかけとなることが期待される。学び手にとって必ずしも好意的に受け入れられないものであっても、実際に学習方法を知っていることと、少人数のグループやクラスで実践したり、意見を交わしたりする経験そのものが、学習に向き合う積極的態度に反映されるともいえる。

さらに、⑨ ⑩の表記についても、一般的な「英語の学習」とはみなされないようなものも含んだ記述もあったが、それでもやはり学生にとって学習機会として youtube 動画やスマホアプリで英語学習法を紹介しているものを観れば、学習の一步となるかもしれない。入学したての1年生にとっては、興味をひくもの、英語と何らかの関係のあるものを教材と考え（英語）接触したものの学習履歴と経験をその後、どう活用していくかということについては、その態度を次の学習の一步に導いていくのが教員の課題として求められているといえる。

Dornyei & Mercer (2020) の提唱する学習エンゲージメントに照らし合わせれば、学生のコメントにある「授業で教員から紹介されたもの、授業内のディスカッションでクラスメートが学んでいるもの、紹介されたものを試みた」ことは、授業内の活動が「(学習経験の機会をとらえて) 学習活動に積極的に参加し、集中している状態」と解釈できる。また、「毎日の課題で実行可能か、週何日なら可能か、どの時間帯に学習できるかなど、自分の学習を調整した。」ことは自己調整能力を働かせて学習が「課題解決に向けて思考を働かせている状態」に向かっているとみえる。

また、当該授業では必ず毎時の「発言・発話」が必要であることから、授業初回のオリエンテーションから、間違いをおそれずに授業参加をすることを繰り返し説明し、全ての発言・発話が、クラス全員の可能性を引き出すものであるという教員の信念を学生とも共有をした。学びにおいて「完璧」である必要はなく、学びの軌跡を自分で包み隠さずに見る勇気をもってほしいことについても、授業内で話をする機会をもった。したがって、回答3の「NHKの聞き逃し配信を（・・・中略）毎日できず週に3～4回学習することもあったが、この教材は続けた。」回答4の「好きな洋楽を歌詞の意味を調べながら何度も聞き、一緒に歌えるまでになった。」というコメントからは学習を途中で休止しても止めない（あきらめない）こと、同じものの繰り返し



は学び手が納得いく回数であれば制限はないということも、学生にとっては従来当たり前ではなかった「学び」のとらえ方であり学び方の多様性を学ぶ機会であったといえる。

一方で、当該科目の「自学習」に求められているものが、好きなものを好きなだけ学ぶことに、戸惑いや抵抗を感じた学生もいて、内容が異なる同様の学習媒体を単調に繰り返しておこなった報告もあった。教師主導でおこなってきた「授業」とその指導者が課す「課題」を受動的にこなしていればよかった経験とは異なる「自律」のイメージがとらえづらかったのではないだろうか。その克服法として、回答5の「教員や図書館から借り出したCD付き雑誌は、返却期限があると期日まで学習しないとイケない気になる。」という学習サイクルを自分で作り出す例もあり、当該学生は同じ教材を納得いくまで延長貸し出しをすることで、最終的には学習に満足感と達成感を得られたとコメントの記述をしている。このような学習のふり返りを中心としたグループディスカッションを繰り返すことで一人の学生のふり返りが他学生へ学習のヒントやアドバイスにもなることも多く、協働学習が授業内活動を活性化させ、各々の次の自学に結果として影響を及ぼすことが期待できた。学びの共有から思わぬ波及効果が生み出されたことは特筆に値する。

自由な学びには（困難もあるが）「楽しさ、喜び」が伴うことを継続学習から知ることができ、回答4「学びたいことは『好き』が大切だと思う。」のコメントは学生の気づきであり、回答10「街中でとっさに英語を話しかけられたが、受け答えができたことに自分自身、驚いた。」、回答11「アルバイトで料金や場所について、スムーズに英語で説明ができたのでうれしかった。」という実生活での体験は小さいながらも学生にとっては動機づけとして授業内で感じる以上の達成感や自己肯定感につながる効果があらわれた。

一方、当該授業は「自学習」の習慣形成が主な目的であったが、「発言・発話」を多く採り入れることで、回答6「リスニングの自学習と授業でのスピーキング実践を重ね、人前で話すことの抵抗がなくなった。恥ずかしさを克服したように思う。」、回答12「授業を受けてみて simple English こそが相手に伝わる重要な表現であるとわかった。」という学習進捗に自信をもてたふり返りの例もあった。

さらに、以下のようなコメントから、限られた技能学習を終えたら次の上達したい技能を学習する必要があるという学生の思い込みがあることも実態

把握ができた。例として回答7「リスニングのインプット量は増えたが、会話で即答ができない。インプットの次はスピーキングを実際にすることが大切だと思う。」、回答8「4月は英語ネイティブスピーカーの教員の言うことがほとんど理解できなかったが、リスニングを中心の学習をして学期末はわかるようになった。次はスピーキングをがんばりたいし、長い英語も読めるようになりたい。」という単一技能を順次学習することが継続学習と考えているようにも思われるが、統合的な学習方法を授業内でも実践することで、自学習への導入とする必要性があることも、このような率直なコメントから気づかされることである。

本研究では被験者が寮生活をすることで連帯感情や共同の意識を持ちやすい状況であること、1年前期には週に5日の英語授業があることなど特別な教育環境にあること、少人数クラスであるがために授業内で頻繁にグループワークを導入することが可能である。コミュニケーションの相手を想定して、自分の言葉で表現をすること、つまり聞き手にわかるように話すこと、読み手に読んでもらうために書くことなどについて、初年次から十分な訓練の機会を与えていることから回答13「クラスメートの上手な発表やサマリーの上手な仕方を聞くことがとても役にたった。真似をして発表準備をした。」という他者の学びを自分におきかえることが協働学習の成果としてあらわれている。

## 6. まとめ

本研究では、大学1年前期の「英語セルフラーニング」の授業をとおして、学生の授業外学習の記録とふりかえりから考察をした。英語学習の継続と伸長には、限られた時間の「授業内学習」と学習者の学習意欲や動機づけにより無限に広げられる「授業外学習(自学)」の連携と深化が必要といえる。さらに以下のような示唆が得られた。

- 1) 大学での学びは学生が「主体的におこなう」ことが基本であることを学生に認識させる。
- 2) 授業外学習について、学期始めに適切な「オリエンテーション」「ガイダンス」が必要である。
- 3) 授業内学習ではインプットに基づくアウトプットの機会を創出する。

4) 授業内学習では多様な学びを実際に体験することで自学習へのトリガーとする。

5) ふり返りの機会をもつ、協働学習の場を設定することで学びを共有する。

以上のことが、自尊感情をもち、自分の学びに責任を負う自律学習者の育成をおこなう大学英語教育に課せられた課題解決の一助となると確信する。

今回の研究では、被験者数に限界があること、学年進行にともない研究対象学生の学習が「英語セルフラーニング」履修後の学習にどう影響を及ぼしていくかなど、長期的な視点にたつてさらなる研究を進めていく必要があるといえる。

### 参考文献

- 荒木美恵子 (2020). 「生徒に安心してもらうためにできること——気持ちを受け止める、思いを発信する、生徒同士をつなぐ」『英語教育2020年10月別冊号：オンライン授業・動画配信ガイド』46-47. (大修館書店)
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84 (2), 191-215.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. NY: Plenum Press.
- Dornyei, Z. & Mercer, S. (2020). *Engaging language learners in contemporary classrooms* (Cambridge UP) [鈴木章能、和田玲 (翻訳) (2022) 「外国語学習者エンゲージメント——主体的学びを引き出す英語授業」(アルク)]
- 清田洋一 (2010). 「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」『リメディアル教育研究』第5巻第1号, 37-43.
- 村上正行 (2022). 「大阪大学におけるコロナ禍による1年生への影響と全学初年次教育——「学問への扉」の実践——」『初年次教育学会誌』第4巻第1号, 62-69.
- Oxford, R. L. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. Rowley, MA: Newbury House.
- Tanoue, Y. (2004). Investigating Beliefs and Strategies of Japanese University Students in Learning EFL. *Learning Education and Technology* 41. 37-56.
- 田上優子 (2005). 「生涯学習としての英語：non-strained learner が示す自律学習」『香住ヶ丘レビュー』第11号, 157-170.









## 付録2

## Self-Reflection &amp; Final Achievements

(to be completed at the end of the course)

There is no final examination for this course. Instead, your teachers will use students' portfolios for grading purposes. Naturally, some students make more effort than others and they should (in fairness) be awarded higher grades. In order to help us, please use this page to summarize your participation in the GSL course.

- How much effort have you made during this course?
- To what extent have you improved your English? Can you demonstrate this?
- What else do you need or intend to do in order to improve?